

# 選手育成のためのサッカークラブのビジネスプラン

## The Business Plan of Football Club

1K0 3B1 5 3 4 氏名 濱田 道人

指導教員 主査 間野 義之 先生 副査 木村 和彦 先生

### 1、緒言

先のサッカーワールドカップ、ドイツ大会において、日本は1分け2敗で予選敗退となった。前大会の16強を上回る、8強入りを目指していた日本にとっては失敗というに十分な結果だった。そして、その結果だけではなくその内容においても世界との差を痛感させられる大会になった。常にお題目のように繰り返される「決定力不足」などの「個のレベルアップ」という課題。日本は選手育成という長期的な問題を抱えている。

9月にシンガポールで行われた17歳以下のアジアチャンピオンを決める大会において日本は優勝した。その時のメンバーを見ると、21人中1人を除いて全員がJクラブの下部組織に在籍している。さらに、高校、中学年代の頂点を決める高円宮杯においてもクラブチームが上位を占めている。

今まで日本の育成を支えてきた学校の部活からクラブチームへと才能を持った選手が移り、それに伴って日本の育成の責任をクラブチームが負うことになってきている。

ただ、クラブチームの育成の現場においても試行錯誤は続いている。高校、中学などの部活動と比べて歴史の浅いクラブは指導者の確保、育成のノウハウが無い。そのため、部活動、クラブでのプロ選手育成は部活動が未だにリードしているのが現状である。

学校の中にはクラブチームのように下部組織を持つようになった組織もある。高校部活動の強豪は付属の中学に育成組織を設けたり、独自のクラブを作って、そのクラブの選手を優先的に入学させたりしている。また、外部指導員制度を使い、コーチを雇っている中学もあり、部活動のクラブ化が進んでいる。

ヨーロッパや南米などのサッカー先進諸国を見ると、クラブ主導で選手育成が行われており、フランスのような国立のサッカー学校はあるものの、日本のような一般の学校による体育指導の一貫としてサッカー指導が行われているケースはまれである。

プロのスタッフを雇い、プロの育成組織となっていくためにはスタッフに対して正当な報酬を得なければならず、そのためにはクラブという形をとらなければならないのであろう。日本もサッカー強豪国を目指すなら、よりクラブ主導に、移行していくことが必要であるように思う。

### 2、目的

「世界レベルの個」を生み出すクラブを作ることが出来れば、日本のサッカーを大きく躍進させることが出来る。

現在、日本サッカー協会では「平均的なスケールの小さな選手」の増加が問題視されているが、それは協会によって伝達された幾多のサッカーマニュアルとそれを鵜呑みにした指導者増加の弊害である。まるで、ブラジルやイタリアのクラブがクラブ独自の育成方法を模索し確立させた過程のように、どれだけ時間がかかろうとも、サッカーでも日本独自の метод論を持つことができるはずである。

### 3、方法

クラブを作る要素には簡単に分けると指導とマネジメントという二つの領域が存在する。主にここではマネジメントの視点からビジネスプランを作成し、実践する。実践の場としては、クラブサウスユーベFC(NPO法人、会員300名強、キンダー～ユースチームを持つ)において行う。

### 4、結果

「世界レベルの選手を作り出す」というミッションを実現させ、バルセロナ、アーセナルといった世界のビッグクラブと呼ばれるチームの主力となりうる選手を生み出す。

育成した選手を移籍させることで得た移籍金により、運営。日本で初の育成主導のサッカークラブを創設する。

### 5、今後の課題

結果が出るまで最低30~50年以上かかる。世界のバルセロナでさえヨーロッパチャンピオンになるまで60年以上かかっている。この論文の結果が出るのに30年以上の年月を必要としている点が課題である。